2022.02.13 七里教会　　最上光宏

「光のあるうちに」　　ヨハネによる福音書 12:27-36

今、テレビでは毎日、北京での冬季オリンピックの報道が流され、日本の選手たちの活躍ぶりが紹介されています。暗いニュースが多い中で、若い選手たちの活躍ぶりになにか勇気が与えられるような気がします。初めてオリンピックに出場した若い選手が堂々と金メダルを獲得する一方、当然メダルを取るだろうと期待されていたベテラン選手がメダルを逃すような波乱が展開され、喜悲こもごもです。オリンピックの精神は、本来、参加して競技を楽しむこと自体にあるはずですが、最近はどうも、それぞれの国の威信にかけて、何個金メダルを獲るか、ということだけに関心が向けられ、メダルを逃したら、国の名誉を傷つけたような、プレッシャーが選手たちにかけられているような気がします。昔のオリンピアでの競技の勝利者に与えられた冠は、月桂樹の枝で作られた冠でした。それは、国家の栄誉などではなく、あくまでも競技者自身の健闘をたたえる「栄光」のしるしでした。

先週学んだヨハネ福音書 12 章 23 節で、イエスさまは、**「人の子が栄光を受ける時が来た」**と言われました。イエスさまにも、「栄光を受ける」その時が来たのです。しかし、イエスさまのお受けになる「栄光」は、人との争いに勝利して獲る栄光ではなく、人から受ける栄冠でもありませんでした。イエスさまの受けた栄光の冠は「月桂冠」ではなく、「いばらの冠」でした。イエスさまはその冠をかぶらされて辱めをうけ、十字架に磔にされて殺されたのです。イエスさまにとって「栄光」は、自分の名があがめられることではなく、あくまでも神さまのみ名があがめられることでした。そのために、神のみ心に従い、ユダヤ人もギリシャ人もすべての人が救われるために苦しみを担い、自分の命を献げることでした。そのことをイエスさまは、一粒の麦を例にとって**「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ」**(24 節)と言われたのです。イエスさまにとっての「栄光」は、自らの死を通して、主を信じるすべての人に永遠の命を与え、神さまのみ心を成就することでした。

今日の 12 章 27 節以下の記事は、それに続いて語られたイエスさまの言葉です。**「今、わたしは心騒ぐ、何と言おうか。『父よ、わたしをこの時から救ってください』と言おうか。…」**　これはイエスさまの独り言のように語られた言葉のようですが、これは、これまでイエスさまが弟子たちに語って来られた言葉と何と違っていることでしょう。イエスさまはあれほど確信をもって、「人の子が栄光を受ける時が来た」と語り、一粒の麦の譬えをもって、ご自分の苦難と死の意味について語られたのに、その直後に、心を騒がせ、父なる神さまに「この時から救ってくださいと言おうか」と自問しておられるのです。この「わたしは心騒ぐ」という言葉を、ある註解者は「胸がどきどき

してならない」と訳しています。自分の苦難と死を前にして平然としておられる人は誰もいません。たとえそれが神のみ心であり、それが自分の使命だとしても、「自分の死」は決して平常心で受け入れられるものではありません。イエスさまは、私たちと同じ「全き人」となられた神の子として、私たちと同じように、愛する者の死に涙し(11:35)、ご自分の死を前にして、心の動揺を覚えたのです。

しかし、イエスさまは決して失意に落ち込んだり、死の恐怖から逃れようとしているのではありません。神さまのみ心を問いつつ、**「しかし、わたしはまさにこのために来たのだ」**(27b)と自分に言い聞かせ、**「父よ、み名の栄光を現わしてください」**と祈るのです。自分の思い、自分の栄光が実現するためではなく、神さまのみ心が成り、神さまの栄光が現わされますようにと祈ったのです。

この箇所は、マタイ・マルコ・ルカ福音書の「ゲッセマネの祈り」に相当する記事です。マタイ福音書によれば、イエスさまは悲しみもだえて「わたしは死ぬばかりに悲しい」と訴え、うつ伏せになって3度も「この時を過ぎ去らせてください」と祈りつつ、「しかしわたしの願い通りではなく、御心が行われますように」と祈ったことが記されています。そして祈り終わった後、「時が来た」と眠っていた弟子たちを起こして、決然として、捕らえに来た人々の前に進み出たのです(26:47-56)。

ヨハネ福音書のこの箇所では、「み名の栄光を現わしてください」というイエスさまの祈りに対して、天から大きな声が聞こえたというのです。それは、**「わたしは既に栄光を現わした。再び栄光を現わそう」**(28)という神の声であったのです。「わたしはすでに栄光を現わした」とは、御子イエスをこの世に遣わして、御子の言葉と業を通して神さまは十分にみ心を示した、ということです。「再び栄光を現そう」とは、御子の十字架の死と復活を通して、決定的な救いの御業を成し遂げる、という神さまのご計画を示す言葉です。イエスさまは、この天からの声に応えて、神の栄光のために立ち上がったのです。

しかし、この神からの天の声は、そばにいた多くの群衆にとって、「雷が鳴った」としか聞こえなかったのです。またある人にとっては、「天使がこの人(イエス)に語ったのだ」としか受け取られなかった、というのです。つまり、だれ一人として、天からの声を自分たちに語られた神の言葉として聞くことが出来なかったのです。イエスさまはその天の声を聞いて、「この声は、あなた方のために語られた言葉だ」(30節)と言われたのです。　私は、この箇所を改めて読み返して、ハッとする思いがしました。神さまがイエスさまに語られたみ言葉は、私たちのための言葉であり、私たちの聞くべきみ言葉だ、ということです。神さまは、常に私たちのために、天から語りかけ、み心を示しておられるのです。しかし私たちは、その声を「雷が鳴った」程度にしか感じてい

なかったり、自分とは関係のない、他人事のこととしか聞いていないことが多いのです。テレビやラジオでもそうですが、電波が届いていても、アンテナの向きが悪かったり、チャンネルが合っていなくて、せっかくの電波をキャッチできないのと同じです。神さまは、聖書を通して、また礼拝の説教を通して、また様々な出来事を通して、私たちに常に、天から語りかけておられるのです。けれども私たちの心が、自分のことやこの世のさまざまな事柄に心を奪われていると、神さまからの御声をキャッチできないのです。音の響きを聞いても、何を言っているのか、心に届かないことが多いのです。現代のように、騒がしく、人の声や色々な雑音の多い中で、静かに祈り、聖霊の導きのうちにみ言葉に耳を傾ける時が、ほんとうに大切だと思います。

イエスさまは、天からの神の声を「雷」のようにしか感じなかったり、ひとごとのように聞き流している群衆に対して言われました。**「今こそ、この世が裁かれる時、今、この世の支配者が追放される。わたしは地上から上げられるとき、すべての人を自分のもとへ引き寄せよう」**(31-32 節)。イエスさまは、今こそ、ご自分の死と復活によって、神さまの御業は完成し、この世は裁かれ、この世の悪しき支配者は追放され、み心にかなったすべての人が、主の救いにあずかる時だ、と語られたのです。イエスさまは、「神の国」は、「今」すでに始まっているという切迫感をもって、今こそ、主に従って、永遠の命にあずかる時だ、と呼びかけているのです。それが、35 節以下で語られていることではないか、と思います。

「光は、いましばらく、あなた方の間にある。暗闇に追いつかれないように、光のあるうちに歩きなさい。暗闇の中を歩く者は、自分がどこへ行くのか分からない。光の子となるために、光のあるうちに、光を信じなさい」(35-36a)。 イエスさまは十字架の死を前にした、緊迫した状況の中で、「今、光のあるうちに光の中を歩め」と言われたのです。

ロシアの文豪トルストイの作品の中に、「光あるうち、光の中を歩め」という短編小説があります。この題名は、ヨハネ福音書のこの箇所からとられたものです。この作品には「閑人(ひまじん)たちの会話」と題する短いプロローグ(序文)がついていて、ある金持ちの屋敷に集まった客たちが、たまたま人生に関する真面目な会話をする場面が描かれているのです。そこに集まった人たちは、みな裕福で幸せそうな人たちなのですが、話し合ってみると、誰一人自分を幸福だと思っている人はいないのです。また誰一人、自分はキリスト者としてふさわしい生活をしているという人もいないのです。皆それぞれに、「こんなふしだらな生活をしていてはだめだ」「こんな倦怠感に満ちた生き方をしていて、悔いを残しつつ死んでよいのだろうか」と話し合うのです。皆、それぞれに、こう生きなければならないという、神さまのみ心を頭では分かっていても、今さら新しい

ことを始めて何になるのかと、色々理由を付けて実行に移そうとせず、口先だけで論じ合うだけだったという、そういう姿が描かれているのです。

そして、それに続く本文は、紀元一世紀の原始キリスト教の時代のキリキヤの国を舞台に、ユリウスという金持ちの青年とパンフィリウスというその家で奴隷として働いていた青年の物語が展開されているのです。この二人は同い年で大の仲良しで、一緒に塾で学び成長するのですが、卒業した後、それぞれ分かれて違う人生を歩み出すのです。ユリウスは裕福な父親のもとで、贅沢で放蕩三昧な生活を送るようになり、父親を困らせ、母親を悲しませるような荒れた生活をするようになるのです。一方、パンフィリウスは、病気の母の看病をしながら、母と共にキリスト教徒として、同信の友たちと共同生活をするのです。当時の教会は、持ち物を共有して互いに分け合い、托鉢のように街の人から食べ物やお金を寄進してもらって、貧しい人々のお世話をするという働きをしていたのです。たまたま、二人は久しぶりに出会って、ユリウスはパンフィリウスがキリスト者としてそのような生活をしていることに大変驚くわけです。当時はキリスト者だというだけでも、ローマの官憲に知れたら処刑される時代です。「お前のような優秀な人間が、どうしてそんな生活を送らなければならないのだ。貧しい人々のために犠牲になるなんて、欺瞞だ」と責め立てるのですが、パンフィリウスは、「自分たちはキリストによって救われて、幸せなのだ、だから喜んで貧しい人々に仕えているのだ」と説明するわけですが、どうしてもユリウスには分からないのです。そしてユリウスは、ますます快楽的な生活に陥り、父親の財産を放蕩につぎ込み、しまいには、父親まで殺害することさえ考えたりするようになるのです。そういうすさんだ思いの中で、彼は、パンフィリウスが語ったイエスの、「すべて重荷を負うて苦労している者は私のもとに来なさい。休ませてあげよう」という言葉を思い起こし、パンフィリウスのいるキリスト者の群れを尋ねていくのですが、途中で出会った医者にそそのかされ、キリスト者に騙されてはいけないと言われて、また元の生活に戻り、破滅的な生活を繰り返すわけです。そのようなことを 3 度も繰り返し、最後に彼は誘惑者である医師を振り切って、パンフィリウスのいるキリスト者の群れを訪ね、やっと魂の平安を得るのです。この書の終わりはこういう言葉で締めくくられています。「それでユリウスは安心した。兄弟たちのために全力を傾注して労苦しつつ生活を続けた。こうして彼は、喜びの内になお20年生き延びた。そして肉体の死が訪れたのも知らなかった」と。この最後の「肉体の死が訪れたのも知らなかった」とは、「光の子」として、「永遠の命」にあずかることが出来たということを意味しているのです。

私たちも、「光のあるうちに、光の中を歩み」光の子として、神さまの栄光を現わす者でありたい、と願います。　　アーメン